

特別支援教育専攻

指導教員 高原 光恵

板東 加容子

1. 問題と目的

自閉症スペクトラム障害 (ASD) 児は不安障害を併発するリスクが高いこと (神谷ら, 2010) から、「不安」という感情と長く付き合っていくためのセルフコントロール力を日常的に身につける必要があると考える。福富(2015)は、ASD 児の「感情理解」と「怒りや不安のセルフコントロール」として「運動・活動・かかわり・イメージ・考え」の順に5つのプログラムを実践した。怒りや不安の場面において、HF-ASD 児が最も使用したのは、「考え」のテクニックであったと報告している。また金子(2005)が、反抗挑戦性障害 (ODD) を併存した注意欠陥多動性障害 (ADHD) 児の行動変容へむけて、「ODD を併存した ADHD 児の対応に苦慮し、児の問題行動について検討した結果、自尊感情を高めるよう共感的にかかわっていくことで、人との信頼関係を再構築し、比較的短期間で行動に変容が見られた。」としている。

これまでの教育実践において、ADHD を併せ持つ発達障害の子どもは、人とかかわることで、周囲の様子に気づき、自己をコントロールしている様子がうかがえた。ADHD 児は、活動的だが失敗経験の連続から自己評価が低くなりがちであるため、教職員が共通理解のもと肯定的にかかわることで、互いに安心感をもち、いつでも相談できる関係を築いておくことが大切であると筆者は思う。

そこで本研究では、感情コントロールに課題のある生徒に対して行われた指導実践例を挙げ、社会的自立を促すための発達の程度に応じた指導の特徴について、定性的及び定量的分析に基づき明らかにすることを目的とする。

2. 方法

(1) 対象者 中学3年 (研究依頼当時)
女子1名 Sさん

(2) 研究協力者 小学5・6年時担任・
中学3年時担任・スクールカウンセラー・
特別支援学校 高等部1年担任

(3) 分析資料
(小学5年を201X年, 中学1年を201Y年,
高等部1年を201Z年とする。)

・指導記録書 (201X年～201X+1年,
201Y年～201Y+1年)

・Sさんとのかかわりに関する聞き取り
:面接による言語記録(201X年～201X+1年,
201Y+2年, 201Z年)

・検査報告書 (201X年～201X+1年)

(4) 研究手続

・201Y+2年 8月
学校長と現担任との打ち合わせ

・201Y+2年 9月
研究協力についての保護者の同意書

・201Z年 8月 高等部担任との打ち合わせ

(5) 分析方法

小学校高学年を第I期, 中学校を第II期とし,

時系列に取組についてまとめる。実践における指導・配慮を(A)物理的支援(B)心理的支援(C)人的支援に分類して紹介するものとする。

3.結果と考察

(1) 個々のエピソードにおける定性的結果

特別支援学級での学習・生活環境を整えることを第一に、Sさんが問題行動を繰り返さないよう指導上留意した点と、Sさんにとって一番大きな影響力をもつ保護者の障害理解への配慮について振り返りながら検証する。

(小学校期) 交流学級と特別支援学級で過ごすときの気持ちのバランスを保つため、「教職員間の支援体制」「視覚支援」「学習内容や量の調節」等に取り組んだ。実態の改善はみられたが、思春期を前にまだ気持ちの不安定さが残り、感情のコントロールが難しい状況であった。

(中学校期) Sさんとのかかわりを通して、「感情調整」「障害受容と薬物療法」「パニックの原因」「パニック対応」「生活記録(日記)の効用」「劣等感」「言葉かけ」「学習意欲の向上」「意識や行動の改善」「進路選択」「保護者との情報交換」「家庭訪問」の観点から、心理的安定や学習意欲の向上にむけた感情コントロールの指導についてまとめる。

(2) 介入の分類における定量的結果

① 校種別による指導・配慮の分類率

小学校での指導・配慮の分類に比べ、中学校では心理的支援(B)が多くなっている。心理的支援は大変時間を要するものであるが、生徒とのよい関係が定着すれば、その後のSさんや保護者への指導・配慮が施しやすくなり、教育効果も大きいと思われる。

② 時系列による指導・配慮の分類・分布(中学校)

各学年とも年度当初は、新しい教室環境のもとで過ごしやすいう物理的支援(A)に重点

を置いている。また1年時の4・9月に、2年時の4・6・10月に心理的支援(B)が多くなっているのは、1年時の入学直後や夏休み後、2年時の進級時や進路相談・学校見学時にサポートが必要だったのではないかと考えられる。

③ 学年別指導・配慮の分類別累計(中学校)

各学年における指導・配慮を分類別にみると、1年時に比べ2年時はどの指導・配慮の分類も減少している。教職員や保護者のSさんに対する生徒理解が進み、Sさん自身の情緒が安定することで、自己サポートできる自主性もみられるようになったためと思われる。

④ 中学校における指導・配慮の分類(A)(B)(C)の関連性

感情コントロールの指導において、物理的・心理的支援を伴う人的支援(AC)(BC)が(C)のみの支援より多いのは、保護者支援を中心に、物理的環境の整備や心理面におけるサポートを行っていたからであると考えられる。保護者支援を通してSさんの実態を多面的に把握し、指導・配慮に生かしていくことの重要性を感じる。

(3) 中学校期における感情コントロール支援のあり方について

生徒・保護者・担任の三者の関係にねじれが生じないよう配慮し、教育相談を進めることで、本人の感じ方や考え方の修正に早めに対処することがパニックの回避にとって大切である。

(4) 今後に向けて

作業学習においてより落ち着きや丁寧さが望まれるところである。これから高等部で行う現場実習に向けてより情緒が安定するよう、引き続き心理的・教育的サポートとともに、薬の継続的服用を視野に入れることも必要である。社会的自立をめざし、感情のコントロールを図りながら職業的スキルを身につけてほしいと思う。